

総評 2021.2月分 杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。

「煮沸したふきんの湯気で／和らぐ台所の空気／／暮らし。／清潔で強かな言葉のかたち」(春町美月)大阪府

ふきん、湯気などの具象が存在感をもって立ち上がり、「暮らし」という非常に抽象的なものを鮮やかに浮かび上がらせている。

「短日のうどんぼろんとざるを出て」(長谷川柊香)宮城県

つやつやしていて、熱くて、すばやく逃げるものはなんでしょう、という一つの問いかけのようなものが、「うどん」を超え、生のやわらかさに触れている。

「だれにでも／頼れるきみと／古書店の詩集を買った／火はとどろいて」(さいう)愛知県

「きみ」との違いから芽生え、衝撃をはしらせる「何か」に、こちらも打たれる思いがする。

「傘をさす／持ち手が腕に繋がって／そうして雨に近づいてゆく」(梁川 梨里)群馬県

傘というモノを介した天との幸福な一体感。恩寵は日常に降り注いでいることに気づかされる。

「春の月を／ちくわに押し込んで食べる」(細村 星一郎)東京都

なんだかとても美味しそう。春の滋養がゆっくりとからだにしみこみ、夏の開花にむけて充満する力を感じさせる。

「たんぼぼ、の音澄み切って／風邪のとき／かけてもらった毛布のようだ」(さいう)愛知県

澄み切った音が、澄み切った愛情をつれてくる。視界から消えても、言葉の響きにのみ残る記憶というものがきつとある。耳を澄ませたい。

今月は、推敲のあとが残る、よい作品に数多く出会いました。丁寧に磨きをかけて、自信作を投稿することが、「上達」への近道かと思います。それでは、来月もお待ちしています。